

AIと共存する未来

酒匂中学校 三年 新山 結月

最近の人工知能の発展はめざましく、私たちの生活のあらゆる場面に浸透し、誰でも気軽に使えるようになってきている。実際に私も学習の時に、わからないことを質問したり、英作文の問題を出してもらったりと、便利に使うことが多い。しかし、その急激な進化ゆえに、「AIが人間の仕事を奪ってしまうのではないか。」という不安の声も挙がっている。そこで私は、AIと共存する未来について考えてみることにした。

まず、AIの得意なこと、苦手なことについて考えてみた。AIは大量の情報を高速に処理し、正確な答えを出すことが得意だ。そのため、工場の製品検査や事務処理などの正確さや速さが求められる仕事は既にロボットに置き換えられつつあるそうだ。また、文章作成や翻訳、画像生成などの分野でもAIの能力は人間に迫りつつあると思う。実際、私が学習でAIを使うときも、AIは数秒で答えを出してくれる。人間が時間をかけて調べる作業を、瞬時に行ってしまうのを見ると、「人間の出番はなくなってしまわないか。」と不安になる。

OECDの調査によると、現時点でも約28%の職業がAIによって自動化されつつあるそうだ。このようなことから、AIは大量のデータを正確に処理する能力において、人間を凌駕していると言い切っても過言ではないだろう。

次にAIの苦手なことについて考えてみる。私がAIを使ううえで人間にまだ遠く及ばないなと一番実感するのは「心」の部分だ。実際に、AIに悩みを相談したことがある。友だちとのつき合い方に困ってどう関わったらいいか質問すると、型に当てはめただけの温かみのない心配をしてくれただけで、なんの参考にもならなかった。

「心」は人と人との関わりにおいて非常に重要なものだ。それを強く感じたのは陸上競技の大会の時だ。競技中、走っていて、息が続かず、「もう走らないで倒れてしまおうか。」と思うことがあった。しかし、仲間の「がんばれ」という声があつて、走り切ることができた。「心」のこもった応援、励ましは人間を大きく鼓舞させるものだ。さらにこの「心」のつながりはスポーツに限らず、日常のさまざまな場面でも大切だと思うシーンがある。たとえば、自分が落ち込んでいる時に友人や家族がかけてくれた「大丈夫？」というほんの小さな言葉の方が、AIの何行にもわたる形だけの励ましよりも、何倍も気持ちになる。このことから「心がある。」という面においては、AIは人間に遥か及ばない

と言えるだろう。

次に、先ほど挙げたA Iの得意なこと、苦手なことを基にA Iに奪われるリスクのあるものとそうでないものを挙げてみたい。奪われる可能性のあるものとして、データ入力作業、レジ業務、物流の倉庫内作業、経理の入力作業など速さや正確性が求められるものがあると言われている。これに対して、A Iには取って代わることができない仕事として、医者、接客業務、心理カウンセラー、教師などが挙げられている。これは、相手の心の状態を読み取り信頼関係を築く必要がある仕事である。つまり、「人の心」の問題に寄り添ったり一緒に考えたりできるのは人間だと言うことができるだろう。

最後にA Iと人間がこれからどう共存していくべきかを考えた。先ほど述べたように、A Iは高速で正確に処理できる点においては人間を凌駕している。しかし、「心」と言う点においては人間に大きく劣る。このことから、お互いの弱さを理解し合い、それを補いながら共存していくことが重要になっていくはずだ。A Iと共存しながら未来はどんなふうに発展するのだろうか。まだ誰も経験したことのない、豊かで可能性にあふれた社会であってほしいし、そういう社会を築いてみたい。